只見短歌会　五月詠草

大塚栄一　指導

九十七の母は臥しゐて鶏小屋の卵を取りにゆけぬ日多し　古川　英子

箸持てば遠くに独り住む孫のことを語れど誰も話さず　齊藤ちひろ

造成地に建売り家屋並びゐて幟はためき宣伝競ふ　吉津　政枝

手直しに余りし苗をまとめ置く田の角々に水を引き込む　目黒　富子

こぶし苑のベッドの上で裏山のわらびを採りし夢に目覚めぬ　五十嵐英子

軒先に菖蒲を祝ひ風呂に入れし五月節句の行事も廃る　渡部ゆき子

継ぐ者のなき山畑を荒さじと年多き身に日ごと鍬振る　馬場　八智

電灯にと友より賜ひし紐引けばバレリーナの人形踊る　五十嵐夏美

健康茶作らむとして孫とわれ蒸したる柿の葉を広げ干す　皆川　恒子

休日に早く目覚めて畑にゆき野菜の苗を我は植ゑ来る　渡部ヨリ子

免許更新孫に止められ九十の夫は朝よりテレビ離れず　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　六月例会

目黒十一　指導

春の虹立てど干上がる畑かな　リウコ

目覚ましのごと囀りの背戸の山　一穂

野焼き組に火の手の上がる村普請　洋子

鹿沼土山積みにしてさつき市　吉児

牡丹の崩れや空に白き月　敦子

神頼む参道行くや貝母咲く　礼

七重八重西洋石楠花池に映え　一灯

蝦夷春蝉の初音聞きたり畑仕事　恒夫

山晴や豆の三種を今日蒔かん　又壱歩

保存食へ時間をかけつ春惜しむ　邦男

子雀の甘え啼きして朝の庭　康女

切株やぜんまい籠はまるまると　笑羊

出征の奉納幡や朴の花　

ぜんまいを採む山の神足なげて　

虫干しの兜や孫は社会人　

雪月花幾山越えて米寿かな　

雪国の軒の深きに菖蒲葺く　

横一列川風を呑む鯉幟　

露天湯に身を沈むるや青葉木菟　

吹く風や今年と限る浮苗挿し　

さか上がり出来て幟に胸を張る　

手代掻く山田泥水翻し　

桐の花乗車降車も無人駅　

山晴や待つ郭公の二た声目　

人影も見えて田植機軽やかに　

昼時や苺の花に蝶の来て　

庭石の蜥蜴てらてら目覚めけり　

豆飯やすこし愉しき今日の日に　